

「二元対立」から抜け出そう

倫理研究所 理事長 丸山敏秋

「禍に因（より）て福を為す。成敗の転ずるは、たとえ糾（あざな）える縄のびとし」

（『史記』南越列伝）

どこも閑散としていた異常な大型連休が明けてから、列島各地の様相がずいぶん変わってきました。制限緩和に向けて、動き始めたからです。非常事態宣言は、ほどなく全国で解除になるでしょう。強い初夏の陽光が差し気温が上ると、コロナウイルスの活性度は鈍ります。ほぼ予想通りですが、コロナウイルスが消滅したわけではなく、「自粛」の要請はなおつき、気を緩めることはできません。

今回のウイルス感染症パニック（コロナ危機）で目立つたことの一つに、地方自治体の頑張りがあります。メガロポリスの首都である東京都は、他の道府県と一緒ににはできませんが、それぞれに独自性を發揮して感染から人々を守るために、知事を筆頭に尽力してきました。いま日本では、全国の知事が権限を持つて活躍する「知事主導型」になり、中央政府を動かす場合もあるのだと国民は知りました。

それは望ましいことでしょう。東京一極集中を是正し、地方の衰退に歯止めをかける「地方創生」が六年前に発表され、担当大臣も置かれました。けれども首都集中を欲する官僚主義の厚い壁に阻まれ、「創生」は名ばかりでした。それが、全國民を巻き込む危機に遭遇したことで、「地方」の存在感が高まつたのはなんとも皮肉です。

ところでコロナ危機が抱える難題は、よく言われてきたように、医療と経済がトレードオフの関係に陥っていることにあります。たしかにそう捉えれば「あちらを立てればこちらが立たず」という排他的で矛盾した関係は、解決が非常に困

難です。

医療の立場からすれば、なんとしても医療崩壊を防ぎ、感染者や死者をできるかぎり出さないようにするため、活動の自粛を強く求めます。そうなればおのずと経済活動は麻痺してきて、すでに多くの経営者が青息吐息の状態になりました。それが長期化すれば、間違いなく日本は壊滅してしまいます。

*

トレードオフの関係には、二元対立の構図（対極主義）が前提としてあります。たとえば商品の品質と価格を二元とすると、低品質と低価格、あるいは高品質と高価格は成り立ちますが、高品質で低価格の商品はまず生まれません。低品質で高価格な詐欺まがいの商品もないではありませんが、すぐに露見して売れなくなるどころか、会社の信用はがた落ちになるでしょう。品質と価格を二元対立の構図にせず、別の附加值（たとえばサービス）を組み合わせるなどして売れ筋をつくるのが普通だと思います。

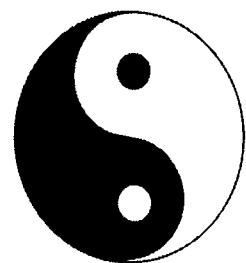
現代人は、何事も相反する二つの要素や要因から成ると見て、両者を対立させる考え方の傾向が強くあります。物質と精神、善と悪、主觀と客觀、自己と他者、資本家と労働者…。しかし二元対立の発想は、日本人にはどうも馴染みません。中国を含む東アジアの人々にもしつくりこないでしょう。なぜなら、たとえば陰と陽の二つは対立的ではあるものの、陰（陽）がなければ陽（陰）は成り立ちません。陰もやがて陽に転じ、陽も陰に変わります。陰中に陽があり、陽中にまた陰があり、互いに他を含み合っています。ゆえにわたしたちは人を見る場合でも、長所と短所を截然とわけて固定化することはありません。冒頭に掲げた言葉「禍福は糾（あざな）える縄」

（次ページにつづく）

5/23(土) まっどく 倫理がす。今週の倫理特別号 ひいすねへ。
「どちらかやとさく雨立出来る夫に知恵を絞る」…考え叶え下さり。

幸運アホー鳥

今週の倫理 — 特別号 — その 8



陰陽図

であると、無意識のうちに思っています。仏教の「縁起」の思想にも、「二元対立の考え方はありません。(図参照)日本のことわざが面白いのは、矛盾した文句が平氣で使われている」とでしょう。

「急がば回れ」—「善は急げ」

「大は小を兼ね」—「杓子は耳搔きにならず」

「三人寄れば文殊の知恵」—「船頭多くして船山に登る」

「急いては事をし損ずる」—「鉄は熱きうちにこれを打て」「好き」そもの上手なれ」—「下手の横好き」

「ウソつきは泥棒のはじまり」—「ウソも方便」

それが本当なのか困惑しますが、どちらも正しいのです。どちらか一方である必要はありません。ことわざは矛盾に満ちた人生の一面を、見事に言い当てたものですから、どれも真実なのです。

*

昨年の月刊誌『新世』(倫理研究所刊)六月号の巻頭にも書いたのですが、倫理運動を創唱した丸山敏雄(一八九二~一九五二)に、次のような逸話があります。

ある日の会合のあと、若い男が近寄つて敏雄に尋ねました。「会社をやめたいと思つてゐるのですが、会社の方はやめさせたくないらしいので、迷つてゐるので……」笑みを含んで聞いていた敏雄は、静かにこう答えました。「あなたが、その問題を考える基準について申し上げよう。実際にどうしたらよいかについてはお答えしない。その基準

というのは、どちらが美しいかといふことです

「……」

つまり、あなたが会社を辞めたほうが美しいか、辞めないほうが美しいか、その美しいほうを探されたらいでしよう。男はやがて満足したしたように、「わかりました、ありがとうございました」と「ざいました」とにつこり頭を下げたそうです。

現代人の多くは、ある行為の結果として、損か得か、好き嫌いかをハカリにかけ、善悪を対立させて判断しがちです。それとは次元の異なる「美意識に基づく判断」が、あつてもよいのではないかでしょうか。それはアタマで考えるよりも、ココロで感じる次元とも言えるでしょう。

コロナ危機における「医療か経済か」というトレードオフの難題も、二元対立の枠組みをはずしてみましょう。ウイルスの撲滅ではなくウイルスとの「共存」という考え方にして、新たな対策も生まれてきます。外出自粛だからといって、家にばかり閉じこもつているのではなく、感染の予防にはなつても、ストレスが蓄積して免疫力が低下します。どちらか一方を取るのではなく、両立できる工夫に知恵を絞りましょう。

人間の世界はコロナ危機で大混乱ですが、モンスーン地帯では季節が確実に移ろい、その時期に咲く色とりどりの花や野鳥のさえずりに心が弾みます。そして北海道を除けばまもなく梅雨。各地でアジサイ(紫陽花)が開花し、目を楽しませてくれます。しかしアジサイの葉には、まだ解明されない強い毒が含まれています。気をつけなければならぬのは、コロナウイルスだけではありません。人は危険と隣り合はせで暮らし、仕事をしているのです。

なお、次回、最終回は映像による発信となります。